

名古屋の古道・街道

池田 誠一

【24】 国道 東海道…日之出橋から河合小橋へ

1 明治の幹線国道

明治の道で忘れてはならない道があります。明治時代の東海道のことです。江戸時代は七里の渡だった熱田と桑名の間、陸路は北を回った佐屋路でした。ところが明治の初めに佐屋川の水量が減り始めました。大型の船が遡行できなくなって、京都から江戸に向かう明治天皇の行列が陸路佐屋に向かうことになりました。このことは以前、佐屋路の時に紹介しましたが、これは街道にとっても大問題でした。

このような状況の中で明治2年頃、地元弥富村の村田宗之助という人が、干拓された新田を通して弥富の前ヶ須から熱田に続く近道「前ヶ須街道」を提案し説得して回ったのです。名古屋藩庁はこれを受け入れて新しい街道を作り、国も明治5年、太政官布告を出して正式に東海道佐屋路をこの新道に切り替えました。(図1) 300年余にわたって続いてきた街道はその役目を終えたのです。

明治6年、国は東海道等の五街道を1等道路としました。明治9年に新しい道路制度ができて道路が国道・県道・里道の3種に分けられたとき、この道は東京から神戸港に至る「1等国

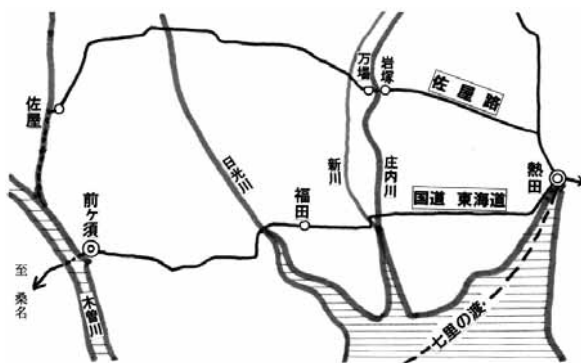


図1 佐屋路と国道東海道

道 東海道」となりました。そして昭和9年、現在の国道1号のルートに切り替えられるまで、国を代表する幹線国道でした。

2 60年間我が国の大動脈 だった道…国道東海道

(1) 新田堤防の道

熱田から西の海岸は遠浅の海だったため、江戸時代になって藩の殖産振興策の中で大規模な新田開発が行われました。初期には1630年に造られた中島新田があり、続いて庄内川の西で鬼頭景義の先導で(東)福田新田、西福田新田が。また庄内川の東では藩が施主で熱田新田が出来

ました。その後福田新田の先には茶屋家が茶屋新田等を、熱田新田の先にも藩が熱田前新田を…と次々に干拓されていきました。(図2) 村田宗之助の提案は江戸時代に出来たこの干拓新田の堤防を伝うものでした。

(2) 国道東海道

この国道東海道の西側の新道は、熱田の七里の渡場から堀川をその西の大瀬子で渡り、南に千年に行きます。千年からは西に向きを変えて熱田新田の堤防、現在の東海通を真直ぐ進みます。庄内川、新川を渡ると少し南に移り、今度は東福田新田、西福田新田の堤防の上を西に進みます。(図3)日光川を渡ると再び少し南下し、西に回ってまた新田の堤防を通り、木曾川の支流筏川に沿って前ヶ須に出ます。その後は木曾川を渡り、長島を経て桑名に達しました。

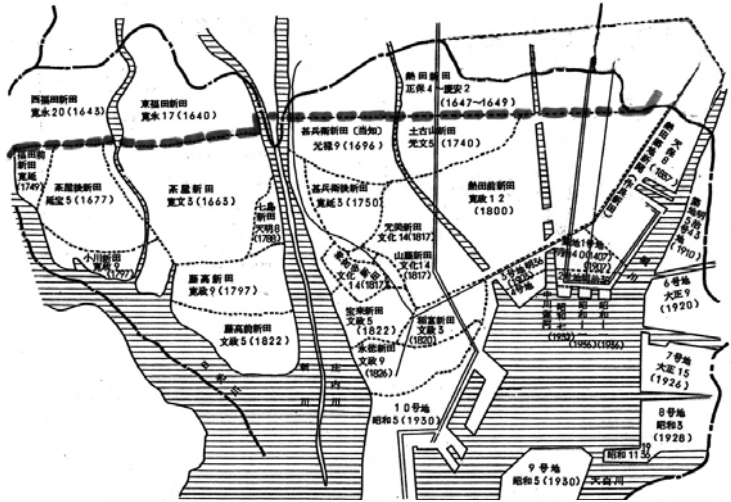


図2 名古屋市港区の埋立(参考文献③より)



落ちついた街並をみせる国道東海道

3 日之出橋から河合小橋へ

この新道の東部分は大半が車の行き交う東海通そのものため、そこから分かれる新川の日之出橋から西に市の境に向けて歩いてみましょう。日之出橋の西の道を南に入り300m程行くと右に隅の切られた道があります。ここに入るの

が昔の国道東海道です。落ち着いた家並みが続きます。いくつかの寺を通り過ぎると右、高台の上に地蔵堂があります。ここは1640年、東福田新田の締め切りの場所でした。この干拓は東と西の海岸から堤防を築きつつ進み、ここで最後の締め切りをしたのです。残った土を盛り上げてその上に開発者の鬼頭景義が地蔵堂を築きました。右手奥には七反野神明社があり、新田の総鎮守として日本国土形成の神とされる国常立大神が祭られています。



図3 市内の国道東海道(明治21年、新道部分)

街道はまっすぐ西に続き



鬼頭景義のつくった地藏堂(右奥に神明社)

国道302号に出ます。その手前に萱津用水がありますが、これも鬼頭景義が7、8ヶ北、甚目寺近くの五条川から引いた用水です。

*

国道を渡ると右に南陽神社があります。ここは南陽町役場があったところで、日清戦争以後の戦没者がまつられています。その裏手に建物が見えますが鬼頭景義の家の跡です。代々勘兵衛を名乗り、かんべいの森と呼ばれるような屋敷でしたが、今は長屋門を残すだけです。その前に明治13年明治天皇が行幸の折に昼食をとられたという行在所の碑が立っています。

道は少しカーブして西に続いています。200mほど行った右奥に春田野神社があります。これも干拓事業中に災害が続いたため景義が伊勢神宮の分霊を招いたものです。



新田をうるおした萱津(かんべい)用水

道は戸田川を渡ります。この道の左側は市街化調整区域のためか、のどかな田園風景が広がります。熱田社を過ぎ西福田の県道を渡ると道が狭くなり、お地蔵さんが奉られています。少し行くと右側に2本の松が立っています。樹齡はそれほどありませんが街道に関係あるのでしょうか。少し坂を上ると福田川です。

川の手前を南に行くと茶屋後神明社があります。茶屋新田、茶屋後新田は、戦国・江戸の時代に徳川家の御用商人だった茶

屋家の中で尾張藩についた四郎次郎の三男の長意とその子長以が開発したものです。この神社は築堤に成功したことに対して三十番神社を建てて氏神にしたものです。新田は明治時代に関戸家のものとなりましたが、境内には、同家が水害対策に尽くし、戦後は安価に分譲したことに感謝する碑が立っています。



鬼頭景義宅の長屋門



南に広がる田園



幅の狭くなった旧道



蟹江川を渡って前ヶ須へ

*

福田川を越えると左には水田が広がります。少し行った所には、いの割神明社があり、その道沿いにも地蔵堂があります。道は右にカーブしてゆるく坂を上ると蟹江川に出ます。街道はここから蟹江、日光両川を渡りますが、明治の頃は1本の河合大橋でした。今は二つの川が拡幅され分離されたため河合小橋と日光大橋になっています。



茶屋後神明社の関戸家記念碑

4 忘れられゆく道の昔

1等国道東海道という名は明治10年頃から18年まで使われていたようです。この年に国道はナンバー制になりこの道は第2号国道と呼ばれました。この道は国道と呼ばれた期間だけでも50年をこえます。

東海道はまさに国を代表する道であり、大動脈です。とくに明治22年、鉄道の東海道線が東京と神戸を結ぶまでは、わが国で最も重要な東西文化・産業の交流の道でした。

昭和9年、長良川に橋が架かり車が通れるようになるとともに、新しい国道が北側の現在のルートに開かれました。同時にこの道は国道の役割を終え、ただの道になったのです。

今、この街道の東側の部分は「東海・通」という名前でその過去を伝えています。

行年や 時と共なる 道をゆく

完

〈主な参考文献〉

- ①愛知県編「愛知県史」(1914、復刻1990、国書刊行会)
- ②日下英之「佐屋路…歴史散歩」(1994、七賢出版)

連載を終えて

小さな縁から、この連載を引き受けて24回になりました。私にとって初めての連載で試行錯誤の連続でしたが、なんとか名古屋の古道・街道を二十数本紹介させていただくことが出来ました。

スペースの関係等で現在の地図を付してご紹介できなかったのが残念ですが、地図を横に置けばその道をたどっていただけよう注意したつもりであります。

身近な名古屋という街にもいろいろな歴史が埋もれています。古道をたどりながら、一つ一つ掘り起こしていただいて、そこに「時」を感じていただけたら…望外の幸せです。

池田 誠一